

Title	佐賀縣の自然地理(四)
Author(s)	堀, 米次
Citation	地球 (1932), 18(3): 195-204
Issue Date	1932-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/184080
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ある。

要 約

これを要するに吳市前面の諸島嶼は著しい人口過飽和の地域で、年々他地方に出稼するものが多いにも拘はらず、尙その住民は自らその地域内の生産を以て生活を維持することが出来ない。これ一に自然力の瘠薄なためであるが、たゞ位置に恵まれて吳市に近い町村は、勞力を提供して収入を得、これをその生活の助けとして居ることが多大である。故に工廠の仕事の多く

なると少くなるとは、直ちにその生活に影響を及ぼすわけで、市に對する勞力供給地域といふことが、一種の郊外町村としての特質なのである。

或小學校長の談によると、尋六の生徒の目標とする處はよい中等學校に入らうとすることではなくして、工廠の採用試験にパスすることである。故に尋六の教育は常にこの採用試験準備の意味が濃厚であると。特殊の經濟事情は教育にも一特相を與へてゐるのである。(完)

佐賀縣の自然地理

(四)

堀 米 次

海岸 此の地帯の海岸は、前述の如き原因に

て複雑なる鋸齒狀の沈降海岸を形成してゐるがその中唯唐津灣のみは灣型を異にしてゐる。次にいさゝか唐津灣の自然地理的な方面を記述し

てみよう。そして順次南方の小灣に及び最後に伊萬里灣をしらべてみよう。

廣義に言ふ唐津灣は、其灣内に横たはる大島によつて二分されて其の西灣の方を特に唐房灣トウボウ湾

と呼んでゐる。此の灣が所謂唐津港と稱して本縣第一の良港たるは勿論、九州西北部海岸に於ける屈指の開港場を形成してゐるのである。それは其の後背地なる唐津炭田の石炭や、前面海洋の水産漁獲物等の集散賑かにして、當地方に於ける人文活動の中心を形成し、本年一月一日より新に市制の布かれる程の賑盛を致したるも此の港灣に負ふ所が大であるのである。灣岸は沖積層と花崗岩とよりなり灣内にある島々は全く花崗岩より成れるもの或は島の頂に平頂なる玄武岩の帽子を被れるものもある。現在の唐津市の主體は、大部分は花崗岩の崩壞物たる沖積層上に發達してゐる。市の一角にある舞鶴城趾は海拔約四十米の花崗岩臺より成つてゐる。此の城趾の臺地は太古に於ては獨立した小島として、海岸より離れて存在してゐたものらしく思はれる。それが第二次的に松浦川上流よりの運搬土砂と、それから玄海の風波によつて發達する砂濱によつて、遂に全く連續せしめられ陸地内にとり込まれて一つの砂嘴尖端の孤丘となつ

たのであらう。此の城趾から灣内の大島の地頭まで約三杆ある。ここは見事なる弓形をなす砂濱をなし、夏季海水浴客の蟠集するところである。ここから西が唐房灣で其の灣口二杆、濱の長さ約四杆あり。専ら花崗岩によりて圍繞せられ、特に佐志の北一杆の間は高さ約百二十米の花崗岩の急崖をなし、其の上部には玄武岩層を乗せて海岸に逼つてゐる。この急崖は此處を基點として更に南方八杆も延びて、勿論海岸を離れて陸地内部に一直線に走つてゐる。一見すれば恰も多輪廻性の隆起海岸によく見るところの海水浸蝕による海崖の發達せるものの如く見える。然しこれは矢張り花崗岩臺地上に溢流したる玄武岩流の縁邊部に於ける單なる急傾斜であらう。

此處より北、湊村の相賀崎に到る間は花崗岩及び其の崩壞物等より成る極めて單調なる海岸であるが、それより西、即ち東松浦半島の北岸から假屋灣に至る間は甚だ複雑にして比較的なる出入を有する海岸を形成してゐる。此の海

第八圖



東松浦半島の沈降海岸

(天然記念物調査第一輯に據る)

岸は第三紀層上に厚く玄武岩が溢流せるものであつて、それが更に全體的に沈降することによつて生じた溺れ谷である。此の複雑なる海岸線を作つたる地盤の沈降が果して如何なる性質の運動であるかは尙將來の研究を要する問題であるが、然し、これら灣入の大體の方向を見れば此の一帶には北々西に近い數列の小斷層系が存

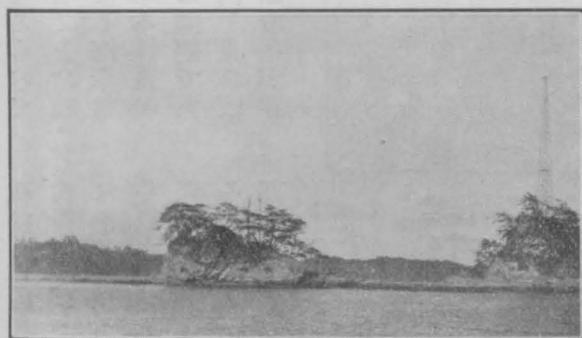
在するものらしい。勿論これらの海岸は、未だ沈降運動を起す以前に於て、幾多の斷層とそれに沿ふ河川の開析の爲に複雑なる地形を呈し、それが次に起つた地盤陷没の爲にかくの如き奥深き溺れ谷を形成したものたるや疑をいれないとして多くのこれら臺地面の山脚と、その山稜部とは多くは岬を形成してゐる。次に本地帯の地圖を挿入して説明に資しよう。

波戸岬、串崎、佐賀崎の如きは頗る細長き岬角を海上に突出し、何れも其外海に面する側には大小の差こそあれ極めて顯著なる海崖の發達がある。これは外界から常に打ち寄する荒き風波によつて出来た海蝕崖である。これらの中特に明瞭なのは波戸岬であつて、長さ星霜の間に海波に洗はれて、瀨鉢と稱する顯礁附近から當に切斷されんとしてゐる。これが完全に離島化するのもおそらく左程の長年月を要せない

であらう。かゝる波戸岬の將來に於ける變化の過程を今迄に明瞭に辿つてゐるらしく思はれる地形が他の個所にある。それは名護屋灣口なる辨天島と加部島との關係である。即ち名護屋灣口なる加部島は對岸本陸の一岬角たる辨天崎との間に水深十尋足らずの水道を通じてゐるのであるが其の中間に僅かに海崖の一部を以て本陸と接續する辨天島を残し、これが本陸と加部島との媒介の如く存するあたりは確に地形的に面白いものである。即ち、これは嘗ての加部島は今日の如く離島ではなくして本陸に接續する細長き岬角であつたものが極めて長き年月の間に玄海の荒き風波に洗はれて遂に狭き地峽部は斷層線にそふてではあるが既に切斷されたものであらう。地頸

第九圖 甲 圖

(海崖遺物としての辨天島)



乙 圖

(其の本陸側に於ける第三紀層)



部の兩面に發達せる海崖が次第に成長して遂に全く、兩者結合して、今や其の中央遺物としての小さき辨天島が過去悠久の此の地形の變移を物語つてゐるものと余は判斷するのである。此の地峽部の地質は表面は玄武岩であり、加部島

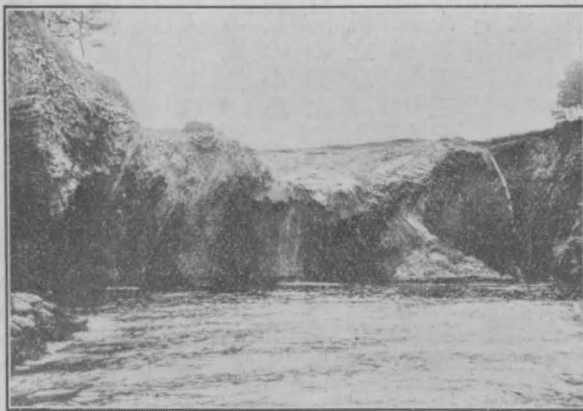
の外洋面には見事なる柱狀節理の海崖をなし又本陸にも七ツ釜等の絶景をなす處もある。然し地峽部の基底をなす地質は第三紀の砂岩層らしくそれは次に掲げる辨天島を中心にする寫眞にあらはれてゐる、乙寫眞には本陸側たる辨天崎に於ける第三紀層の傾斜が明瞭に判明する。甲寫眞では加部島と辨天崎間の辨天島が淺き瀬によつて本陸と連續するところをあらはし、これは嘗ては地峽部として、陸の連絡があつたことを物語るのである。

東松浦半島にある小入江の頭には沖積地又は三角洲の發達の如きは極めて微弱であつて、從つて聚落の形成には自づと窮屈である。この事實は此の入江附近の土地の沈降の時期が未だ割合に新しくあること、竝に其灣頭に注ぐ河川の受水區域が小さくして、從つて大河流の存在もなく、其搬出土砂の量も割合に微少なるに基くのである。

(附)「七ツ釜」 呼子灣外土器崎の一帶は、柱

狀節理の極めてよく發達せる玄武岩から成つてゐる。それが玄海の波濤によつて七ツの洞窟となり、所謂七ツ釜なる名勝を形成してゐる。次の寫眞に示すのはこれであつて洞窟をなす石柱は皆六角柱或は五角柱であつて、直立するもの

第十圖



肥前七ツ釜玄武洞

あり、斜走するものもあり、其の到る處に龜甲紋を象つてゐる。此の中、中央のものは特に大きく、洞門は幅、高さ共に三米に垂んとしてゐる。此處は筑前の芥屋大門と共に九州に於ける有名な玄武洞として遊覽客の多いところである。

假屋灣附近より南方伊萬里町附近までの海岸は概ね第三紀層より成れるものであつて其處には數多の小出入がある。特に假屋灣の西南岸たる入野村イノノムラは此の第三紀層の上部に標高約百米を以つて玄武岩が被覆してゐる。そして此の地方の玄武岩臺地によく見る如き急崖を有するのである。灣内には竹子島外數個の小島あり、又有浦川ウラガハが約八軒の長さを以つて此處の東西構造線に沿ふて西に灌流してゐる。これは大高山に發して西の玄武岩臺地を開析してゐる。そして其の搬出する土砂は、溺れ谷の一部に珍くも東西に細長き沖積地を作つて、其の上に諸岡、新田等の諸部落を乗せてゐる。

以上述べた如く東松浦半島の北端から假屋灣

までは、其海岸線の屈曲も比較的、大にして、又其處の海蝕線の發達も良好であるが、これより以南伊萬里灣に到る間は大屈曲に乏しく、海崖の發達も亦稀である。然し極めて小さき鋸齒狀の出入がこれに代り、又多くの島——長崎縣に屬する鷹島、福島フクシマの如き大型の島を始めとして、無數の小島或は瀬——を有する。特に福島と湯野浦の間には、四十島、傳七島、松島、ウシ島、帆立島、小島等の小島嶼群が存在して、それらは多く、濃藍色の海水と、それによつて洗はれたる第三紀層の砂岩と、其處に生ひ茂れる綠林と相映じて繪の様な美觀を呈してゐる。

扱て次に本縣北海岸に於ける第二の港灣である伊萬里灣についてであるが、これは長崎縣北松浦半島の野崎と福島フクシマの南方とを連ねる線を以つて外海と別れるのである。尤も伊萬里灣の陷沒帶として考察するならば、更に外側なる鷹島其の對岸なる星鹿半島ホシカを連結する線を以て劃すべきであらうと思ふ。此の灣入は見事なる漏斗形を呈し、灣口の幅約六軒、奥行は實に十四軒

を有してゐる。外海の荒き風浪は、此の細長き灣入と、灣外なる福島によつて完全に防止されて、實に波穩かなる好錨地をなしてゐる。このことが嘗て伊萬里港が港灣都市としての發達を見た重要な因子である。然るに灣奥なる有田川及び伊萬里川の排出する土砂は年々多量にして、沖積地の成長も相當に目覺ましい。特に有田川の如きは干拓事業の實行をさえ見つゝある状態である。従つて港内は次第に淺くなり、干潮時の如きは既に灣内の小島たる越木島附近までは僅かに一道の帆船水路を残すに過ぎざる状態となつた。其上鐵道としての長崎線が開通することによつて、此の町の後背地の特産たる有田焼（これが嘗ては伊萬里港から積出された爲めに伊萬里焼の名も有してゐる）は海路による他地への運送が殆んど無くなれることと、それから交通として最もスピードを貴ぶ近代船舶の碇泊港としては此の港はあまりに奥行深くて航路長きに失する事等が原因となつて、伊萬里港の港灣的生命は既に老年期に入れるものである。

何れこのことは本縣人文地理の研究に譲るとしよう。

次に伊萬里町から西北に向ふ海岸線についてであるが、これは極めて屈曲に乏しい。地質は石炭層を挟むところの第三紀層より成り、其の中程に楠久港がある。この港は港内水深くして最近伊佐線（伊萬里から佐世保に通ずる豫定線）の開通あり、俗に伊萬里寄港と稱する汽船帆船の一部は此の港にて荷役を果して、恰も伊萬里町の外港たるの立場にある本港が其の實質に於ては次第に主客轉倒の立場に變りつゝある。

伊萬里灣内には越木島、小島、釘島七ツ島等の第三紀の砂岩より成れる小島嶼がある。これらは何れも灣内に風致を添へるが、別して七ツ島はさうであつて、夏季は遊客で賑ふ。灣の右岸の中程に半島狀をなして牧島がある。もと獨立せる第三紀層の島であつたものが、長き歲月の間に土砂によつて本陸との間は連絡し、今は全く抱き込まれて行政上伊萬里町の一部をなしてゐる。其の北なる釘島は、干潮時には本陸と

の間に砂洲が伸びて連絡し、近く完全なるトンボと化せんとしつつある。尙局部的ではあるが、此の附近に地沁り或は地盤陷落を呈せるところ等がある。この地表の變化が果して單なる局所的意味の小變動であるか、或はもつと大規模なる構造的の意味を荷ふ現象であるかは尙ほ將來の研究を要する問題であるが要するに釘島附近の汀線の一部を若干づゝ變更せしめつつあることは事實である。次に極めて簡單ではあるが筆者が先年黒鹽地方の地表變化について調査せる事項を略記してみやう。

(附) 黒鹽地方の地沁りについて。

これは伊萬里町を去る西北六軒の地たる、黒川村との境界附近に起れる小規模の斷層である次に示す寫眞のA圖は其の新しき斷層崖の一部を示せるものであり、B圖はそれによつて陷落せる一帯の叢を中心として撮せるものであり、左方の松林は舊の地層面である。扨この斷層運動が單に局部的偶發性の小現象に過ぎざるもの

であるか、或はそれとも現象自體としては假令小規模なるにせよ、其の荷ふ意味は更に重大であつて、本地方の地帶構造に關する大きな問題を展開し得べき程の事柄であるかは尙ほ今後の學者の研究に俟たねばならぬ。然しこれは本縣に於ける最も新しい小さい斷層のタイプカルのものとして興味あるものであり生徒兒童にとつては生きた材料とすることが出来る。此の運動は現在に於ても極めて徐々ではあるが尙ほ進行中であるらしく思はれるが、過去に於て最も顯著なる運動は前後二回にあつたものらしい。即ち第一回は明治四十一年九月頃であつて第二回目は大正七年六月頃である。其被害區域は人見岳を中心とする約五十町歩餘と言はれてゐる。人見岳と稱するのは現在に殆んど其頂上を見出し能はぬ迄に陷落してゐるが、嘗ては肥前領と唐津領の境に聳えてよく烽火を擧げた山であるらしい。此の附近の運動は第二回の際に於て特に激しく、人見岳一帯の高地の中腹にありし家屋十六軒は遂に全く海岸の平地に移轉した程で

第十圖 A. 黑鹽地方の斷層

人物は筆者。崖高と比較を乞ふ



B. 全じく其の陷沒地

左方の松林は舊位置の面にして其下の急勾配は其の斷層崖



あつた。崖の最高のものは約十米を残すのである。而して此の徐々なる陷落の反面には牧島の地頸一帯、特に地頸の東北部地域には、局部的ではあるが明かに隆起を示せる地帯あり。嘗て海中にあつた岩盤が既に六米前後も隆起せる處

地帯構造 此の地方は多くの小巒丘陵が複雑に起伏して、其處に一定の系統をなせる山脈を認めることは出来ぬ。これらの地表は、或るところは淺海成の第三紀層より成つて、それが隆起して後に受けたところの地盤の變化と風化水

もある。此の局所的隆起によつて同所を通過せる縣道の一部の如きは其の道程を亂されし爲めに、三度も通路を改變した珍現象もある。これらの運動方向は種々であつて筆者は他日稿を改めてこれを明瞭に記したいと思ふ。

蝕によつて複雑化せるところあり、又或は、其の表面の弱線部を破つて火山岩の噴出があつたりして複雑になつたのである。然し大體に於ては起伏は少なく、凡そ百米乃至二百米の玄武岩臺地を構成してゐる。それは次の寫眞に明瞭である、即ち、遙か彼方に殆んど一線をなす山は皆玄武岩によつて被覆されたものであつて唐津灣内の島々も皆平頂である。



東松浦半島の玄武岩臺地

(遙か遠方なる一直線の山體に注意)

此の一帯の斷層運動としては東松浦半島の海岸部方面に割合に顯著なりしものゝ如く、その方向は多く北々西なることは既に述べた

ところである。されど此の外に此處の地帶構造の方向として注意すべき事は内陸部に於いて縱的構造を示せることである。即ちこの縱的構造とは、南北軸を主として東西方向を従とする構造方向を有することを意味する。これらの事實は、先づ端的には此の地域内を貫流する多くの諸河川の流向によつて知り、或は又、此の南方小地壘地域にある數多の小地壘の方向によつて知ることも出来ることは嘗ての脊振天山地區の地帶構造の説明の際に着眼せる理由と全じてある。この事實は海岸の小彎入を度外視せる大局的な方向等もこれを立證するものである。此の地區内の地壘や海岸線については既に詳しく前述せるが故に此處に重複することをさけて次は本地區内に於ける河川につきて概括的に考察してみよう。その爲めに次に本縣の水系斜面圖を挿入して本區に於ける河川を説明しよう。